

「佐藤・金班」これまでの活動

根岸 親 この分科会は、東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターが進めている協働実践研究の「佐藤・金班」が、「外国につながる子どもたちの教育を地域から育む試み——地域、学校、行政、当事者の協働実践モデル構築を目指して——」というテーマで行うものです。私は、研究班のサブコーディネーターを務めています、根岸と申します。群馬県太田市教育委員会で外国人児童・生徒の教育コーディネーターとして勤務しており、また、本センターのフェローをしています。

今日の進行ですが、まず私、根岸からこれまでの協働実践研究の中間報告をします。その後、2007年10月12日に川崎市の「川崎市ふれあい館」で行われた今日のフォーラムに先立つプレフォーラムの報告を同市の総合教育センターカリキュラムセンター指導主事の佐藤公孝さんが行います。そして第2部ですが、パネルディスカッションに入ります。パネリストは愛知県豊田市・保見団地NPO法人「子どもの国」代表、井村美穂さん、福岡市立香椎浜小学校親子日本語教室「よるとも会」代表で九州大学教授の吉谷武志さんと副代表の古賀美津子さん、「ふれあい館」の原千代子さんと高校教諭で学習サポートボランティアでもある笹尾裕一さんの5人にそれぞれ発表をしていただきます。パネルディスカッションのコメンテーターは、本学特任研究員で「ふれあい館」の金迅野さん、同じく特任研究員の佐藤郡衛・東京学芸大学国際教育センター教授のお2人をお願いします。発表の後、質疑応答、コメントといった流れで進めていきたいと思えます。この分科会全体の進行は、本センターフェローの藤田美佳が担当します。

■ 私たちが目指していることと実践していること

根岸 当研究班では「外国につながる子どもたちの教育を地域から育む試み」ということで、研究を進めています。問題意識としては、ここにお集まりの皆さんはもうご存じのことで、かかわっていらっしゃる方も多いと思いますが、外国に



根岸 親

つながる子どもたちの増加、そして、それに伴って起きている地域のさまざまな変容が見られます。そうした環境に置かれている子どもたちに対して、これまでは主に学校が中心になって支援をしてきましたが、学校だけの支援では限界があるのではないか、地域の活動と学校との連携も不足しているのではないかという課題も見えてきています。

協働実践研究の別の班を担当している野山広さんからお聞きしたのですが、文化審議会国語分科会の日本語教育小委員会の中でも、地域の日本語教室にたくさんの年少者の子どもが来ていて、その教室が学校と連携を取ろうとするが、なかなかうまくいかない、ぜひ学校関係者にもそういった状況を理解し、協力をいただきたいという話も出ているとのことでした。国の協議会などでもこうしたことが話題になっているという実情があるわけです。

地域の支援者、団体と学校、行政その他関係機関とがどう連携するかが求められている中で、学校教育中心からの転換、地域の活動を中核にしたサポートを考えることができないかということで、当班は、抽象的な議論ではなく、具体的な地域をモデルにした協働実践研究を進めてきました。

対象区として主に川崎市川崎区をフィールドに、外国につながる子どもたち、その保護者のことも視野に入れ、学習サポートなどさまざまなことをやりながら、高校、子どもたちが行っている小中学校、川崎市総合教育センターなどの機関、さらには子どもたちを支援するOB、OGなどにもかかわってもらいながら、活動する多様な担い手による協働実践モデルの構築を目指しています。

また、川崎市川崎区だけではなく、今日の第2部のパネルディスカッションに登場いただく愛知県豊田市保見地区や福岡市立香椎浜小学校親子日本語教室「よるとも会」など、他地域の実践や視点から学びながら、抽象的な議論ではなく、具体的な地域をモデルにして、地域から外国につながる子どもの教育を支援する取り組みの構築につながる協働実践研究を進めていきたいと思います。以上です。

■ プレフォーラム「川崎市ふれあい館」でのワークショップ

佐藤公孝 川崎市総合教育センターカリキュラムセンター指導主事の佐藤公孝と申します。「川崎市ふれあい館」で行われたプレフォーラムについて報告します。